

人工知能学会全国大会 特別企画

「研究とビジネスの境界で」開催報告

2009年の人工知能学会全国大会では、「研究とビジネスの境界で」と題する特別セッションを行った。この企画の背景はいうまでもなく、Web技術を中心として、人工知能（AI）の産業応用が急速に進展していることにある。今や大学等の公的研究機関においても起業が奨励される状況にあり、AI関連研究は最もビジネス的活性度が高い分野のひとつと目されている。単に概念的なレベルではなく、起業や事業展開をめぐるノウハウや経験談といったレベルで、文字通り「研究とビジネスの境界」を語ることは、多くの会員の興味を引く所と思われた。

1980年代に試みられたAIの産業応用と、その工学的失敗を想起する時、本セッションの趣旨について感慨深い思いにとらわれるのは我々だけではあるまい。あえてスローガンのように述べれば、本セッションは、かつて冬の時代を経験したAIの、社会へ向けた新たなる進撃宣言とも言えよう。

招待講演

本セッションの第1部として、3人の著名な講師による招待講演を行った。

最初に、ソニー社からスピンアウトしてPlaceEngineというユニークな位置情報取得システムの事業化を進める末吉隆彦氏が、「『PlaceEngine』技術とビジネス展開について」と題して講演を行った。PlaceEngineのデモ・ビデオを交えた紹介に加え、それを事業化しようとした経緯、クウジット社の設立をめぐる裏話など、よく準備された資料を用いた、聴衆を飽きさせないすばらしい講演であった。

次にAcademic Resource Guideの岡本真氏が壇上に登り、「ウェブ技術と産学連携—世界を変えるイノベーションを生み出すために」と題して講演を行った。岡本氏はIT関連技術の事業展開のいわばプロデューサーとして著名であり、氏の講演は、Yahoo社在籍中の事業展開の経験、そしてここ10年ほどの日本におけるIT関連の産学連携に関する動きを詳細にレビューされ、きわめて中身の濃い有用な講演であった。

最後に、「ギークとスーツのバランス経営」と

題して、データセクションの橋本大也氏が講演をされた。橋本氏は、ギークすなわち技術志向の人種が、スーツすなわちビジネス志向の人種から理解を得るための10か条を、「スーツが100%理解できる簡単な話をせよ」、「(数%の精度向上に凝るのはやめて)80%できていたら売り込め」、「ブログを書け、本を出せ、個人ブランドを創造せよ」、「弱い紐帯を多数維持せよ」など、明快なメッセージに集約して提示された。人工知能学会の雰囲気完璧にマッチした一流の知的エンターテインメントという趣で、非常に盛り上がった。

パネルディスカッション

本セッションの第2部として、招待講演のお三方に、大学教員として事業展開をなさっている新谷虎松・名工大教授、藤本和則・近畿大学准教授、それに担当プログラム委員の大向を加えた6名によりパネルディスカッションを行った。今回は司会（井手）が次のようなお題をパネリストに提示し、それに沿って雑感を述べていく形式にした。

「技術は大切、〇〇も大切」

「パクったらダメよ」

「ビジネスをやれると思った瞬間」

「恍惚を感じる時」

「若者よ：成功する人の条件とは？」

橋本氏の講演にもあったように、よほどの革新的な技術でなければ、技術的独自性というのは事業展開のためには必ずしも重要ではなく、特許出願も出資者へ向けての一種のエビデンスといった程度の意味しか持たない。むしろ、事業化そのもののアイデアと粘り強い挑戦、積極的な情報発信を介したブランド価値の確立、などの方が大切であるという点でパネリストの意見はおおむね一致した。

以上、初めての試みではあったが、企画側としては密度の濃いセッションとなったと思っている。会場にいた研究者が得たものも大きいはずである。わずかな精度向上に意味があまりないとすれば、我々が目指すべきは問題創出型の研究である。学会に安住しているとそのような視点を忘れがちになる。本セッションは、研究側に緊張感を与えるという意味でも、非常に意義深い企画であったと思われる。

[井手 剛 (IBM 東京基礎研究所) 、
大向一輝 (国立情報学研究所)]